

+ 6 4 【ふなむし】

晩秋のある日の夕方、祠の前で焚火をして、懐爺と一緒に、焼き芋や焼き団子が、焼きあがるのを待っていたことがあります。

この思い出は、ぼくの少年時代の思い出のなかで、かくべつ楽しく、美しく、そして美味しかったものです。

そのときにしたのが、曲亭(きょくてい)、滝沢馬琴(たきざわばきん)の『南総里見八犬伝(なんそうさとみはっけんでん)』の話で、ぼくは粗筋本(あらすじぼん)で読んでいたので、よけいに面白く会話をしたものです。

とくに盛り上がったのは、八犬士の話でした。

犬江親兵衛(いぬえしんべえ)

犬川荘助(いぬかわそうすけ)

犬村大角(いぬむらだいかく)

犬坂毛野(いぬさかけの)

犬飼現八(いぬかいげんぱち)

犬山道節(いぬやまどうせつ)

犬塚信乃(いぬづかしの)

犬田小文吾(いぬたこぶんご)

「順に、仁、義、礼、智、信、忠、孝、悌。これらは人間にとって大切に貴いものです」

「よくわからんが、はっけんしは、いいのう。わしは、いぬどしじゃから、よけいにいいのう」

懐爺にいわせると、八犬士は実はみんなおばけだとのことで、それで余計に盛り上がったのでしょう。

ぼくは犬塚信乃が好きだといい、懐爺は犬江親兵衛と犬坂毛野が好きだという。

ぼくの理由は、『八犬伝』で最初にでてくる犬士だからであり、(もしかすると女装で登場するからであり)、懐爺の理由は、【ふなむし】(船虫)というおばけを退治したのが、他の六犬士だからだということです。

「もしかして、かいじいは、その【ふなむし】がすきなんかのう」

ぼくは単純にきいてみました。

「嫌いといえば嘘になりますが、【ふなむし】が殺される場面が、あまりに残酷で、わたしは【ふなむし】に同情しているのかもしれない」

「どう、ざんこくなんじゃ」

「木にくくりつけて、牛の角で、刺し殺させるというものです」

「たいしたことはないのう。わしは、ぶたに、くいころさせるのかと、おもっておったわ」

「金ちゃんは、鈍感ですねえ」

「かいじいが、びんかんすぎるんじゃ。もしや、かいじいよ、その【ふなむし】たあ、ふねにつく、むしのおぼけではのうて、おんなで、しかも、びじんじゃあんめえな」

ぼくはまた単純にきいてみました。

「すいません、船につく虫ではありません。すいません、女で、美人です」

懐爺は舌をだしました。

「ほれみたことか、このすけべじい」

懐爺は頭をかきながら、

「それでも【ふなむし】は、しぶとい毒婦（どくふ）です。中国の潘金蓮【はんきんれん】にそっくりです」

「どくふたあ、どくあるふじん、ということかのう」

「毒婦とよばれたひとには、お伝さんとか、お貞さんとかいろいろおりますが、【ふなむし】にくらべればかわいいものです」

「おんなは、みんな、おおかれすくなかれ、どくがあるもんじゃ」

ぼくはませたことをいいました。

「そこまでいうなら、わたしも露骨（ろこつ）にいいましょう。【ふなむし】は、ついには、男と接吻（せつぷん）して舌を噛み切り、財布を盗んで、男の亡骸（なきがら）は海に捨てる、すさまじい毒婦となっていくます。こうなるともう、人ではなくて、おぼけです」

「そういうすさまじさが、たぶんかいじいは、すきなんじゃろのう」

「すさまじい毒婦というものには、男の本能を揺さぶる、どこかすさまじい魅力がありそうですね。しかも〈あぐね果てる〉といった感じがあ

ります」

「あぐねはてる、たあなんじゃ」

「自分のどうしようもない毒を、どうしようもないでいる。そんな感じですかね」

「ひとごとみたいにいっとるが、かいじいも、【ふなむし】と、せっぷんして、【ふなむし】に、したをかみきって、ほしいんじゃろうが」

「前のほうはそうですが、後のほうはちがいます」

「あほじゃのう。せっぷんなんか、するもんじゃない」

「接吻はいけませんか」

「あたりまえじゃ。それがなんになるというんじゃ」

「つまり、その、あの、なんになるというと、その、あの、愛をたしかめあう、ということ」

懐翁の混乱（こんらん）ぶりは珍しいので、ぼくは、たたみかけました。

「あい、というものは、たしかめあうものなんか。たしかめあう、ということ、うたがとる、ということじゃろ。うたがとって、あいなんか」

「つまり、その、あの、男と女は、その、あの、接吻するのが好きなのです」

「ほれ、へたな、りくついうて。けっきょく、すきなんじゃろ。すきですることなんか、わしが、おぼけをすきなのおなじで、わがままなんじゃ。それとも、かいじいのいう、あいとやらは、わがままなんなのかのう」

「愛はわがまま、ではありません。愛は貴いものです」

「ほらみろ、せっぷんは、あいじゃなかろうて」

「すみません。接吻は愛ではありませんでした」

しよげた懐翁ほど、こどもごころに（とはいえそれはぼくだけのこころかもしれませんが）可愛いものはありませんでした。

可愛いものをやっつけたくなるのも、こどもごころです。

「まあ、どっちにしたって、せっぷんは、かいじいには、とてもにあわんわな」

ぼくは懐翁の乱杭歯をみながら、笑いころげました。